THE BOOK REVIEW PRESS
図書新聞 3581号
2023-3-4 土
〒169-0075東京都新宿区高田馬場3-13-1 ノーブビル3階
（亀戸オフィス）〒136-0071東京都江東区亀戸8-25-12
電話03(3937)3318 FAX03(5937)3819
購読料（送料共）1年46週13200円
半年24週6840円 振替00180-2-673481
定価300円（本体273円）
発行 武久出版㈱©

書評

▼芦川進一著『河合おんぱろす 特別号 予備校空間のドストエフスキイ――学びと創造の場、その伝達のドラマ』11・17刊、A5判二六四頁・本体二四〇〇円・発行＝河合文化教育研究所／発売＝河合出版

# いま一度、ドストエフスキイの世界に近接してみたい

## ドストエフスキイは、大学受験を控えた予備校生（浪人生）の時機に、読むのが相応しい

**皆川 勤**

「予備校空間のドストエフスキイ」という書名に、まず惹かれてしまう。わたし（著者より二歳年少）や著者の世代は、露文専攻を目指すのでなければ、ドストエフスキイを読み始めるのは二十歳前後が多かったような気がする。時代的なこともあるが、トルストイは、それ以前に読むかもしれないが、やはり、大学受験を控えた予備校生（浪人生）の時機に、読むのが相応しいと、いま五十年以上前のことを自分自身で振り返れば、思う。

本書の著者は、八十年代後半から三十余年にわたり河合塾で英語科を担当し、河合文化教育研究所ではドストエフスキイ研究会を主宰し現在も続けているという。その経験から醸成されたものを、本書では二部構成で綴っている。

第一部の、「「予備校graffiti」――私が出会った青春」では、「河合塾の本科と（略）ドストエフスキイ研究会で」、著者が「出会った若者たちの中から」、「キラッと光ったものを与えてくれたのべ六十人について報告」したものだ。そのなかで、わたしが、最も印象深く感受したK君について引いてみたい。

「K君は私が週一回担当をしていた高三クラスの生徒さんでした。頭脳の聡明さと性格の明るさに加えて、彼が私に印象を与えたのは、その年（1989）浪人生を対象として八回にわたり開かれた「エンリッチ講座―ドストエフスキイ『夏象冬記』を読む―」に、高校生としてただ一人ほぼ全回出席をし、講義後の質疑応答でも積極的に発言を繰り返したことでした。群を抜いて生命力と探究心に溢れた高校生だったのです。」（K君の三つの「旅」）

K君は、その後、「駐在保健婦制」の歴史を卒論から修士論文、博士論文と「一貫して追い続け、（略）見事な日本近代史を書き上げた」という。「駐在保健婦制」とは、1942年に、「創設された制度」で、「駐在」の保健婦さんは、全国各地で劣悪な衛生状態の改善や国民の健康意識を高めるべく務め、その後の法改正の結果、（略）「保健所」の保健婦さんとなった」。そして、K君は、『駐在保健婦の時代 1942～1997』という著書を著わす。さらに、高校一年の時、「宮本常一の『忘れられた日本人』のことを知り、（略）大学入学直前に帰郷した時」に読んだという。やがて、『「忘れられた日本人」の舞台を旅する――宮本常一の軌跡』という二冊の著書を出すことになる。わたしも、K君と同じ年代に、宮本常一を知って、かなり傾注した時期があった。そのことは、いまもわたしの基層に潜在している。そして、K君は、もうひとつ、ハンセン病に関心を抱き、『来者の群像――大江満雄とハンセン病療養所の詩人たち』という著書もある。

著者は、そのようなK君の軌跡を、「高校三年生の頃から既に『夏象冬記』にぶつかり、大学生になるとドストエフスキイ研究会に参加し続けた彼が、その後の長い三つの旅を経て、改めてドストエフスキイ世界に立ち戻り、新たな思索を開始したのだと言えるでしょう」と述べていく。

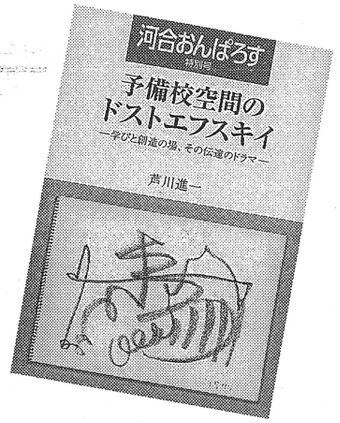
第二部「絶対のリアリティ」の探求――様々な問いとの出会い」は、著者自身が「ドストエフスキイとの出会いについて」、語ったものだ。著者は、1968年に東京外国語大学、フランス語学科に入学する。まさしく大学闘争（あるいは高校も含めて学園闘争といういい方もあった。著者は本書では、敢えて、「大学闘争（紛争）」という書き方をしている）の渦中にあった。しかし、著者は、「得も言われぬ解放感を味わった」けれど、やがて、その「解放感は一瞬にして消え、新たな違和感と失望感、そして空虚感が襲ってきた」たという。

著者は、静岡県三島市出身で、中学時代、地元で英語塾を開いていた小出次雄先生との交流が始まる。大学闘争後に感受した「混沌と空虚」を払拭するために、「大学院入学まで、延べ六年余り」を「時間がある限り故郷の三島に戻り、小出先生の許で勉強させていただくという新しい「大学生活」が始まる」ったと述べていく。そして、「小出先生が常に話題されていたドストエフスキイとの、（略）正面からの取り組みが始まる」ったことになる。

「シベリア流刑中のドストエフスキイが最初の四年間、懲役囚として読むことを許されたのは新約聖書だけであったことはよく知られた事実です。このシベリアに於ける「聖書熟読という體験」から始まり、その後のドストエフスキイがイエス・キリストについて、そして「神と不死」の問題について記す時、彼の念頭には聖書テキストの何れかの箇所が必ず置かれ、そのイエス像を基に思索が展開されると考えてよいでしょう。」「小出先生にとって「絶対のリアリティ」という言葉は、「神」であり、「イエス・キリスト」であり、「真理」であり、「永遠」であり、「美」であり、「聖なるもの」であること、このことを私が理解するまでには長い時間が必要でした。」

わたしにとって、ドストエフスキイに関しては、キリストや新約聖書と重ねて考えてこなかったといっていい。そして、「絶対のリアリティ」という刺激的な捉え方を著者が述べる時、いま一度、ドストエフスキイの世界に近接してみたいと思わずにはいられなくなった。

（評論家）




BAR
山﨑文庫
絶望は無料です。
〒107-0052
東京都港区赤坂6-13-6
赤坂キャステール102
赤坂駅6番出口から徒歩5分
03-6804-5800
営業時間 17:00～翌3:00
日曜定休